

赤尾保志 対談シリーズ

の
ま
じ
ま

19

【ゲスト】中嶋常幸
【ホスト】赤尾保志

なかしま・つねゆき
あかおやすし

まえがき

医療と宗教そして心（有限と無限のいのち）との交わりを題目に置き、各界でご活躍の方々との対談は心踊らされるものがあります。

医療では、時間が経過するなかで、経験的法則に基づき裏打ちされた技術が、活用利用されています。肉体に対し侵襲性の強い作業が行なわれるのが医療行為であるためです。

宗教は、空間の中で常に現在形の言葉で多くの物事を言い表しています。A C 一三〇年クレルモンの宗教会議において、修道院内での医療行為が禁止されました。心と肉体との問題を分離した画期的なできごとでした。

この三つの題目である心・医療・宗教を当距離で論じ合おうと言うことには、この本に目を落としていただける多くの方々の問題提起を試みたいという思いがあります。夫々の専門分野の方々がその領域を超えて考える一助になることを願っております。

今回の対談を始めるに当たり、お力をお借りした方々にはこの紙面を通じて感謝の意を表したいと思えます。

平成二十一年三月吉日

赤尾保志

赤尾保志 対談シリーズ

のびる

19

【ゲスト】中嶋常幸
なかじま ちねゆき

【ホスト】赤尾保志
あかお やすし

赤尾保志対談シリーズ、十九回目にご登場いただくのは、プロゴルファー中嶋常幸さんです。中嶋さんは、今さら紹介するまでもありませんが、一九八〇年代、青木功、尾崎将司と並んで、A Oと呼ばれる、日本のプロゴルフ界に一時代を画した名プレーヤーの一人です。

この時期、連戦連勝で負けることを知らなかった中嶋さんにも、やがて、転機が訪れます。八十年代後半から、七年もの長い間、勝つことから見放されたのです。

どのようにして、中嶋さんはこのスランプから抜け出すことができたのか。絶頂期とどん底をとものに経験したとき、中嶋さんはそこに何を見たのでしょうか。自らの人生と重ね合わせた中嶋さんの、生きることへの想いを語っていただきました。

なお、文中に登場するゴルフアールや、関連用語については巻末の説明をご参照ください。



赤尾

私が最初に中嶋さんを知ったのは、アマチュアゴルファーを育成することを目的にした「全日本パブリック・アマチュアゴルフ選手権」というのがあるのですが、中嶋さんはそれに出場されていましたね、あのときです。

実は私もその選手権にチャレンジしていたのです。私とは一回りぐらい年齢は違うと思いますが、ものすごい少年が現れたと思いました。上手でしたね。それ以来、ずっと私の憧れのゴルファーになったんです。

中嶋

そうですね、ライバルだったというわけですか！ あれは、一九七二年でしたね。その時、私は十七歳でした。

赤尾

けた違いの強さでしたね。凄い人だなと思いました。それ以来、ずっと気になっていたのですが、あの選手権の後、すぐ日本アマチュアゴルフ選手権で、軽く、優勝してしまいましたね。

中嶋

そう、翌年、軽井沢の大会でした。でも、軽くなんて、とんでもないことです（笑い）。

赤尾

以来ずっと、中嶋さんの後姿を格好いいなあと思って見ていました。今でもです。

〽昔のゴルフは活気がありました

中嶋

あの頃のゴルフというのは、今から思うと、活気がありましたね、ゴルファー全体に。今は、何かこう、例えて言えば、ファーストフードで食事をとるとか、そんな環境で一人離れて食事ができる

赤尾

といったようなゴルフなんですけれど、当時のゴルフというのは、にぎやかな大衆食堂で、これっ、お代わり！　なんて大きな声出して、みんなでワイワイ言いながら食べているような、そういう活気がありました。

当時は、いろいろなスタイルのゴルフアークがいらつしやいましたね。杉本英世さん、河野光隆さん、安田春雄さん、関西には杉原輝雄さんとか……。

海外からは、当時、アーノルド・パーマー、ジャック・ニクラウス、ゲリー・プレーヤーというビッグスリーがやって来ました。みなさん強烈な個性がありました。当時は日本の選手もずいぶん、個性的でした。

中嶋

グリーンから見えていても、離れたティーグラウンドに誰が来たのかすぐわかったものですよ。今は、全然わかりません、僕らプロゴルファーが見ていても……。優勝でもすれば別なのですが、そうでなければプレーしているのが誰なのか、さっぱりわかりません。ジャンボ尾崎と一緒に回りながら、「ジャンボ、あれ誰だかわかる？」「わかるわけがないだろオレが！」（笑い）。

歳は違っているけど、記憶に残る活躍をしてくれると覚えているのですが、そうでないと、誰だかわからないことが多いです、特に近頃の選手は。

く変わってきたゴルフ事情

赤尾

これは私見ですけど、こういうことが言えるんじゃないかと思うんです。私が始めたころは、ゴルフ道具も限られていて、使うクラブも、パーシモンとスチールシャフトでした。それを使って、どうやってまっすぐ打つとか、どうやって曲げるかというのは、その人の個性的なワザで工夫したものですよね。ところが今は、道具がいいから、まっすぐ飛ばそうと思えば……。道具を自分の手わざで使いやすくする工夫なんて今は、殆ど必要ないんですね。

中嶋

そうですね。パーシモンとスチールシャフトの時代は、いろいろな工夫をして、いろいろな打ち方をしていたものです。今はあらゆることで恵まれています。大学生、高校生、中学生はいろいろなテキストをふんだんに見ることができまし、インターネットも使うし、コーチもしっかりしている。海外の試合だって簡単にみられる時代ですから、いい情報がふんだんに入るわけです。

ところが昔は、私はそういう経験はしていませんが、多くのプロはゴルフ場の研修生からプロになっているんですね。入口も狭いし、情報も今とは比べものにならないくらい少ない。勢い、その師匠の影響が大きいんです。師匠しか知らないのです。ですから、たとえばあのプロは安孫子出身、あの人は川奈出身といったふうになるわけです。

ところが、時代が少し下って、私とか倉本（昌弘）君以降の世代は学生やアマからプロになって

いくことが多くなって、ゴルフ界も飛躍的に様相が変わってきたんですね。変化を押し上げたのは、テレビの衛星放送の普及などで、リアルタイムで入って来る海外の情報、それに、育ち方の違いや道具の進化というプラスアルファ。そういったことがゴルフの姿を大きく変えていったのでしょうね。

赤尾

私が最初にゴルフクラブを買ったのは一九六七年、でしたでしょうか。マグレガーターニー、MTモデルでした。

中嶋

その頃はMTとスポルディング、この二つしかありませんでした。ちよつと安くなってパワービルド、それからウイルソンがありましたね。これは小さいヘッドで当てることさえ難しいんじゃないかというようなクラブでした（笑い）。

赤尾

ピッチングウエッジはウイルソンスタッフ、サンドウエッジはソールが厚くて、削って使った覚えがあります。

くみんな自分で工夫していました

中嶋

当時のゴルフアはみんな、そうやって自分で工夫したものです、ヤスリを使って、自分流にアレンジしていました。たとえば、グリップの皮をはいで、下まきを少し増やしたりして、自分用のグリップに巻き直して使っていたものです。

今はだれもそんな面倒なことしないでいいんです。ゴルフショップに行つて、「ちょっと太くして！ このグリップつけて！」で済んじゃうんですよ。

赤尾

クラブにしても、魂を込めるかのように、みんな作り込むんですね。

中嶋

腕をクラブに合わせるんだ！ というような感じでしたね（笑い）。

道具だけのことではないんでしょうけど、まさに手作りの世界だったんですね。

赤尾

アイアンの場合なら、プロは角度をレギュレーションの範囲内で手直しをしながら使っていたようですね。

中嶋

若い頃は、溝がもうなくなつてしまつているアイアンを使っていましたものね。今は、アイアンが錆びるまで使う人なんていないでしょ（笑い）

赤尾さんも、ゴルフ、ずいぶんやっておられたんですね？

赤尾

私のまわりには、かなりマニアックに、ゴルフにのめり込んでいる仲間がいましたね。その中の一人は、のちにプロになりました。学習院を出た人で、波多野修さんといいました。

中嶋

覚えてますよ、私より2、3歳先輩でした。

赤尾

なぜプロの試験に受かったのかって聞いたら、最後のロングホールで二打目に入っちゃった、それでプロになれたんじゃないかって言うんです。いきなりアルバトロスです。

パーフォーのホールではなかったんですね。パーフォーの第一打で入れたのは…

くただひとりアルバトロス！

中嶋

僕しかいないです。「中日クラウンズ」という大会で、名古屋ゴルフ倶楽部の和合コースの一番パーフォーのホールでした。コースは真っ直ぐなんですが、その時のグリーンは右でした。ちょうど木が邪魔していてピンの位置は見えなかったんです。打った瞬間、これはいい当たりだな、という感触で、(グリーンに) 乗ったかなと思いました。するとグリーンの方からワッツという歓声が上がって、ティーグラウンドからグリーンまで歩く途中も、ギャラリィから、おめでとう！ おめでとう！ という声がかかって、それはすごかったです。三百何十ヤード、照れながら歩いて行きました、結局そんな状態でハーフ終わったら、ワンオーバーでしたよ(笑い)。平常心なんかでいられませんでしたから。

赤尾

狙って打ったのではないんですか？

中嶋

そんなことはないですよ、グリーンに乗ればいいな、っていうくらいの気持ちですね。シヨートホールだって、最近は乗ればいいなって思って打ってますよ(笑い)。和合の一番ミドルホールは、飛ぶ人は乗りますから、イーグルチャンスにつければいいなとは思いますが。

ここだけの話ですけど、あのコース、実は大の苦手なんです。全部、砲台グリーンですから、ボールがすーっと落ちてしまいますしね(笑い)。安孫子の方がよっぽどいいですよ。

赤尾 和合は十七番のシヨートホールでドラマが生まれるところですね。

「数々のドラマを生んだ日本オープン」

中嶋 池越えて、しかも左側には深いバンカーがありましてね。ここで日本オープンがあつたときに、

トップはオーストラリアのブライアン・ジョーンズで、ワンストローク負けていたジャンボが、その深いバンカーに捕まつたんです。

しかし、そこからジャンボは入れてしまつたんです。絶体絶命のピンチから、ジャンボは芝の一本一本を凝視したらしいんです。ライを読んでいたのですね。決してラッキーじゃなかった。狙つて入れたんです。

結局、それでブライアン・ジョーンズと並んで、勝ちました。ブライアン・ジョーンズはあのジャンボの気迫に押されて、最後はボギーでした。ゴルフはドラマですね。

赤尾 十八ホールで、いろいろなドラマが生まれるんでしょうね。

中嶋 そうですね。いいスタートを切ったからと言って、いいゲームになるわけではないし、悪いスタートを切ったからもう終わりでもないし、不思議ですよ、ゴルフというゲームは。ゴルフが人生の縮図といわれる所以でしょうね。

中嶋 プロは十八歳のとき日本アマで優勝をして、二十一歳でプロ入りますね。そして一九八〇

年代に入ると、勝つのが当たり前という時代が続きました。その頃は如何でした？

く連戦連勝時代

中嶋

当時は、優勝することしか考えてなかったですね。優勝できないことの方がおかしい、と一九八二年あたりから八十六、七年ぐらいまでは、ずっとそう思っていました。

パターも、絶対にワンパットで入る距離はどのくらいか聞かれれば、まあプロでもせいぜい一メートルくらいなものですよ。一メートルちよつとでも、十回に一回、二十回に一回ぐらいは外れることもあるんです。ところが、勝っていた時には、四、五メートルくらいの距離も外れるほうがおかしいと思っていました。

よくジャンボに言われました。「お前はパターだけでもってるな」って。今なら、ありがとうございます、と言うんですが、でも当時は若かったですから、「パターがもつと入っていれば、もつ」というスコアが出ますよ、ショットはいいんだから」、と言い返してました。

ジャンボも青木さんも年上の先輩なんですけれど、ゴルフ場に出たらライバルですからね。ジャンボも青木さんも、何するものぞという感じなんです。その当時は、パターを褒められても、こんなものじゃないと思っているから、ありがたうと言えなかった。でもそれは大きな間違い。褒められたら、「ありがたう、そうだと思っんですよ」と、今なら喜んで言いますね。

今はだいぶ変わりました。「そうですね、バターのおかげなんです」と言わなくてはダメなんです。人間素直が一番。褒められたら、どうも、と言うのが一番なんです。

日本のゴルフ人口、一時はずいぶん増えたようですが、最近の事情はどうなんですか。

この何年かちょっと落ちていたんですが、最近になって、また少し回復の兆しが見えてきましたね。

それまでのゴルフって、おかしかったじゃないですか。プレー代が三万円も、四万円もする。高級ワインがおいてある。その時代にはバカな話がいっぱいありました。ゴルフ場のレストランで、客が、いちばん高いワインを持って来いって言って、最後に支払いの時、百八十万円、請求されたという話がありました。そのワインはロマネ・コンティですよ。

頼んだ人は、ゴルフ場にそんなワインがおいてあるなんて、思いもしなかったでしょうけど、頼む方もどうかしてるし、百八十万もするワインを置いてあったゴルフ場も問題ですよ。

要するに、庶民のゴルフからはかけ離れてしまった時代があったんです。バブルがはじけた後も、一時は、若い新入社員たちはゴルフなんかしてはいけな、というような雰囲気がありました。そんなこんなで、ゴルフ人口は減少していったんですね。

ところが最近、石川遼君とか松山英樹君の刺激で、ゴルフをする十代前半の子供たちが増えているんです。仮にプロにはなれなくても、小さなときから親しんでいけば、大人になってもゴルフを続けるという人たちも多くなるでしょうね。

もうひとつ、いい条件としては、ひとところに比べれば料金がずいぶん安くなりました。適正な値段に落ち着いてきた、ということでしょうか。ですから、僕は、ゆっくりでいいと思うのですが、徐々に右肩上がり、ゴルフ人口は増えていくと思っています。

く全米オープン出場の際

赤尾

確かに、今おっしゃったように、若い方の活躍がめざましくて、海外へもどんどん行ってますね。中嶋さんたちの時代には選ばれた人しかなか行けませんでした。

中嶋さんが勝ち続けていたころ、一九七九年から八四年まで、私は、アメリカ駐在でニューヨークにいたんです。その頃、全米オープンに出場していた中嶋さんにお目にかかっているんですよ、後姿なんですけど。オークモントのときでしたか、見に行っただけです。

中嶋

そうですね！ 全米オープンは東部で開催することが多かったんですが、オークモントのときには、ニクラウスとプレーヤーと一緒にでした。三日目や最終日には、(グレグ) ノーマンかパーマー、すごい組み合わせに恵まれたんです。そう、ノーマンとは三日目でした。彼、一番ホールでラフからのショットを空振りしたんです、「おい、球が出て来ないぞー」なんていうこともありました(笑い)。

赤尾

オークモントには、何番だったか、横長のショートホールがありましたね。三番アイアンで打つ

ような。

中嶋 八番じゃありませんか？ 長いショートホールで、横に長いグリーンでしたね。

赤尾 中嶋さん、あの全米オープンの際に、八番しっかり乗せてましたね。それ、ちゃんと見てました。

中嶋 ぴったり乗ったかどうか、覚えてませんね（笑い）

赤尾 一番強い思い出は、最後の十八番、上りの左ドッグレッグになつてますでしょ、ここをたしかトム・ワトソンが木の下に入れてしまったのですが、そこからグリーンに乗せて来たんですよ。さすがプロは違うなと思いましたね。中嶋さんなら同じように出来るかなと思いましたね。

中嶋 そこまでできるのは、ごく一部の人ですよ（笑い）

くアメリカ遠征、裏ばなし

赤尾 私は日本のメーカーの駐在でニューヨークに行っていたんですが、あちらにいる日本人たちは日本から来る選手をどうやって応援するか、みんなずいぶん、肩入れして応援しましたね。楽しみでもありました。

中嶋 ニューヨークには遠征でよく行きました。ある年、こんなことがありましてね。ロングアイランドにあるシネコックヒルズでの全米オープンのときなんです、この辺、格好のホテルがないんで

す。で、ある方のご好意で、フランスの電機会社の会長がここに持っている別荘を使ってもいい、ということになったんです。

行ってみると、とにかく広いんです。敷地が五千坪くらい。部屋数が二十もあるような家なんです。ここを同行した男性三人で借りることになって、大会に参加したんです。

この時は、(リー)トレビノや(レイモンド)フロイドなどと一緒に回って、初日終わったところで、三位でした。もしこの勢いで優勝してしまったら、何しろすごい別荘なものだから、貸してくれたフランス人にどのくらいお礼を出せばいいのか、などと考えているうちに、二日目、三日目で成績はドーンと下がっちゃいました(笑い)。

先回りして、優勝したら、なんて考えてはダメですね。

赤尾 シネコックヒルズは難しいですよ、砂と風で。この向い風では、二百三十ヤード打てませんものね。

中嶋 とにかくアメリカは広いから、地域によつて芝も違うし、五、六種類ぐらいはあるでしょうから、トーナメントに出場するときにも、その違いを知っておきませんか。アジャスト、つまり合わせようとするだけでも大変なんです。

ところが、日本に帰ってくると、忘れてしまうんです(笑い)。松山がアメリカの「メモリアル・トーナメント」で勝って、日本に戻って北海道で試合があったんですが、この時、ちょっと調子を崩してしまったのは、彼は思い出さなくてもいいことを、思い出してしまったからかなと思うんで

す。

赤尾 松山さん、頑張っていますね。

く青木功vsジャック・ニクラウス

中嶋

そうですね。彼は体力もあるし、よく飛ぶし……。松山は、拘らないところがいいですね、鈍感力っていうのかな（笑い）。

よく日本人は、おもてなしが大事だと言うけれど、おもてなしの心は海外に出たら邪魔ですよ。言葉にしなくても私が言わんとするところはわかるでしょ、というこのテレパシーのような感覚が邪魔なんですよ、海外では。イエスカノーか、いるのかいないのか、これです。

だから松山みたいに、おもてなしの心がなくはないのでしょうか、振る舞いが外人っぽい方がいい。青木さんも、どちらかと言うと、そういうところがあるんですね。青木さんには青木ワールドとどうか、自分の世界があるんです。青木さんのスタイルは、相手に喋らせる前にこちらが先に喋ってしまうんです。

面白いことがあって、ある練習場で、青木さんがジャック・ニクラウスに会ったのです。青木さんはニクラウスの肩をポンと叩いて、「ヘイ、ジャックー！」と言うんですよ。それ見ていて、ジョンボ尾崎が「ああいう真似はオレたちにはできないよな」。

そばに行つて「ハイ、ジャック」と普通に挨拶するくらいで、いきなり肩たたいて「ハイ、ジャック！」なんてできませんよ（笑い）。

どういふ人なんだ？ 青木さんという人は、と思いましたね。で、ニクラウスはこう言つたんです。「イサオ、昨日の夜、何食べた？」。すると青木さんは「やあー、昨日は十七番の奥のバンカーに入つちやつて、難しかった」って。英語の単語を並べて青木さんは言うんです。ニクラウスは「いや、そうじゃない、イサオ。昨日の夜は何を食べた？」と、また青木さんは「バンカーショット！ スリーフット。ミスバット！」「そうかあ、十七番はむずかしいよな」って、ニクラウスも最後は青木さんに引き込まれてしまふんです（笑い）。

青木さんは英語を使つていふようにいふて実際は、自分の世界に引き込んで喋っているんで、つまり青木さんの世界で喋る。そうやつて、あのニクラウスでさえも青木ワールドに引き込んでしまふんですから、すごいですよ。とても他のプロにはできない！（爆笑）

赤尾

青木さんは一時期、仙川で練習されていました。彼は将来すごいプロになるよということで、励ます会を大洗ゴルフ場で、二十人ぐらい招かれてやつたんです。その会に私も参加したことがあるんです。

「しゃあんめえ」という言葉が好きです

中嶋

青木さんは本当に自由奔放に生きていますねえ。

僕は、青木さんの「しゃあんめえ」というコトバが好きです。

赤尾

いいコトバですね、私たちもよく使いますよ。

中嶋

どうやっても、仕様が合わないものはしょうがないだろう、人事を尽くして天命を待つ、みたいなものでしょう。そうやってダメなら仕方ないだろう、という意味なんですよ。だけど、青木さんの場合は、やれるだけのことはやった後での「しゃあんめえ」だからいいんですよ。準備不足で「しゃあんめえ」はあり得ないんです。それだったら、あんた、その言葉、使う資格ないでしょう、ですね。

赤尾

ところで、青木さんのパターン見て、外国のプロはみんな驚いたようですね。コッソリ、で終わりますからね。あれ、どうやって打ってるんですかね？「しゃあんめえ」の感覚に近いんですかね。

中嶋

あのパッティングは、アプローチと同じ感覚で打っているんでしょうね。昔のグリーンは重かったので、ストロークする必要性よりも、強さを調節しながらやらなければならなかったんです。そういう意味では、あのパッティングはアプローチなのか、パッティングなのか、もう双子の兄弟のようなものですよ。

今のグリーンのように超高速になってくると大変なんですけど、でも青木さんはあのパッティン
グで、アメリカでも答えを出していますよ。

赤尾

アメリカで、ニクラウスと死闘をやったことがありますね。あのときはとあるゴルフ場で見てい
たんです。結局、青木さんは負けましたけど、いい勝負だったですね。

中嶋

あの時の青木さんは、負けただけど、敗者という感じではなかったですね。勝負ごとに勝者は一人
なんですけど、別の視点から見て勝つか負けるかということ言えば、青木さんは敗者ではなかつ
たですね。

赤尾

見ていて、本当にすごい試合だと思いましたね。

中嶋

中嶋さんも、ああいう勝ち方がすごく多かったんじゃないですか？
僕は負けた試合が多かったんですけどね（笑い）。

赤尾

勝つ試合と相手を負かす試合とは違うじゃないですか。自分に勝って優勝するのと、相手をやつ
つけて勝つのでは、全然違うものなんでしょうね。

く青木さんに勝った！

中嶋

いろいろな選手と優勝争いをしてきたんですけど、ジャンボとセベと青木さんは、すごく印象
に残っているんです。僕が一九八二年に賞金王になったとき、八一年までは青木さんが四年間連続

で賞金王を獲っていたんです。

その当時、日本中の一流のプロはみんな、打倒青木に燃えていたんです。青木功を倒せ！ とね。もうみんな、その一つの思いに燃えていました。何とかして勝ちたい一心で挑戦するのだけれど、青木さんはそれ以上に強かった。尋常なことでは勝てないので、僕は、青木さんの弱点を探すことだと思ったんです。

そして、あることに気がついた。青木さんは、百ヤード以内は世界一、グリーンに乗ったら、もう、青木功のひとり舞台なんです。で、僕はこう思ったんです。これを獲ろう、と。主役というのはその人ひとりですと時間を占有できるわけです。青木さんの占有している時間を僕がとってしまおう、とそう思ったんですね。青木さんの一番の舞台であるグリーンに上がった時に「青木さん、ここはもう僕の時間ですよ」。と言って、相手の最も得意とするところを攻める、これだと思ったんです。青木さんはちよつといらいらし始めましたね、勝負というのはいらいすると負けなんです。

そうやって、青木さんに対して打開策を見つけることができて、僕はその年、一九八二年に賞金王になったんですが、これはもう、まさに青木功を倒す、という一人の人間に対して勝負を仕掛けた結果だったんです。

♪ジャンボ攻略法を見つける

ジャンボやセベに対しても同じ方法でいけるかというと、これはダメなんです。この二人はまた違うタフさを持っているんですね。

で、ジャンボの場合はどうしたかというと、あの人には面白いところがあつてオレを見ろ、とみんなに注目をさせたいタイプなんです。どうだ、すごいだろ、三百ヤードだぞ！ そのジャンボに対しては僕はどうかという、彼を見ないことにしたんです。

ひとつ例を挙げると、一九九〇年の小樽での日本オープン。この時、僕は最終日、四打差を逆転して優勝したんだけど、このとき、ジャンボ尾崎を見ないようにしていたのです。完全に、マイワールドの世界でゴルフをして、六十九というスコアの目標を決めたんです。

日本オープンは難易度が高くて難しいですから、六十九でもすごいスコアなんです。とくに小樽は難しかったので、このスコアを出せば行けると思つた。最終日は四打差で負けていたので、ジャンボがパープレーで回れば、僕が六十九で回って三打縮めても、これでは一打差で負けですね。ただ、六十九を目指して、三打縮めれば、ジャンボだつて人間だから崩れるという可能性がある。そうなれば逆転の可能性もゼロではない、そう思って、自分のプレーに没頭したんです。

十二番で追いついたんですよ。その瞬間から大プレッシャーに襲われました。「とうとう並んだ！

でもまだ六ホールもあるのか」。しかし、それまでの十二ホールが流れを作ってくれているので、無駄にはならなかった。相手は十二ホールを、デフレスパイラルに入った感じだったとすれば、僕の方はインフレ型、上がって行ってるわけだから。そうするとタイになったとき、この差というのが残るんでしょうね。そうして、結果、勝てたんです。

つまり、最初に言ったように、ジャンボに対しては、彼を見ない、自分しか見ないという方法しか使えなかった。

セベ・バレストロスの曲芸

もう一人、セベ・バレストロスは、これまた難しいんですよ。マスターズや全英オープンにも勝ったことのあるスペインのトッププロで、僕は何回も彼と優勝争いをしました。仲が良い友達なんですけど、こんな思い出があるんです。

一九八五年の「ダンロップフェニックス」で、四日間セベと同じ組でした。この時は僕がずっとトップで、セベはひたひたとくつついて来ているんです。

最終日の前の日、ラウンドが終わって練習をしていると、セベがやって来たんですね。「お前、こういうことができるか?」と言って、自分の使っているピンパターを取り出して、構えて、前のボールをひよいとパターの後ろのくぼみに乗せて、後ろ向きにカップの中に入れてみせるんです。曲

芸ですよ。

実は何年か前の「太平洋マスターズ」でセベと一緒にになったときのことを思い出したんです。その時には、この曲芸の作戦にはまってしまつて、一緒にふざけていたんです。オレだつて出来るよなんてね。

その時のことを思い出したものだから、八五年の「ダンロップフェニックス」では、作戦にはまつてたまるか、ということで、彼の曲芸を無視するようにしました。練習場でも、「あっちへ行け」（笑い）。彼は危ない相手を心理的に乱そうとするんです、「楽しくやろう！」みたいな感じでね。スペイン人独特の陽気さ、なんでしょうね。

セベはティーショットが曲がる方なんです、林の中に打ち込んでも、そこからのリカバリは、僕が知っている限り、世界一の名手でした。リカバリーの素晴らしさは天下一品でした。あそこに行つたらどうやつてもボギーだな、と思うようなところからも、バーディーチャンスにつけてしまふんです。そういう凄さがありましたね。

僕はタイガー・ウッズと競つたことはありませんので、分からないんですが、タイガーも多分、一番強かつたところには、そういうところがあつたのだでしょうね。

バレストロスは、とにかくどこからでも打てた。この選手については油断も隙もないという感じでした。ジャンボを相手にするときのような無視する作戦、青木さんのようにグリーンに行つたらオレも主役なんだという作戦も、セベには通用しないのです。

じゃあ、何が大事かと言うと、彼の場合、臨機応変なんです。臨機応変に、こちらが攻めたり守ったりできるだけの高い技術を持っていないと彼には太刀打ちできないですね。自分の技術が高いところにあれば、引いたり攻めたりできるんです。相手としては、バレストロスが一番大変でしたね。そのバレストロスは中嶋さんのことを、世界で最も美しいスイングの持ち主のひとり、と言ったことがあるそうですね。

↓ 身体の衰えを感じ始めた頃

中嶋

確かに、自分がスイングを改造すると言った時に、なぜ、あんないいスイングを改造する必要があるんだ、と言っていました。

セベもそうだし、僕もそうなんですが、身体は歳を取れば関節の可動域が悪くなって、筋肉の伸縮も若い頃とは違う。要するに瑞々しい身体から、まあ、正月の餅で言えば三日ぐらい経った重ね餅のように、筋肉も固くなるんですよ。そういう肉体の衰えとともに、自分が一番よかった時のスイングができなくなるんです。できなくなると、何とかしようと思う。その方向性を探すという作業が、スイング改造という言い方になったんです。三十四、五歳くらいでした。

男ですと、少年の身体から青年になって、それから中年になる。そして壮年という段階に入っていくのですが、三十半ばというのは、変化の時期ですね。なぜかと言うと、自分の身体というのは、

周りの人からちよつと変わったね、と言われるのは自分自身で変化に気づいたはるかに後なんですね。

肉体の変化というのは、本人はまだ初期の段階で分かりますから、スイングも、そのときに何とかして変えようと思って何かするわけです。ところが周りは、その兆しの変化には気づいていないから、なぜ？　と思うでしょうね。

僕の場合、一九八七年のスイングと八二年のスイングとは、分解写真で同じコマ数で並べると明らかに違うのです。ゴルフに詳しい評論家でも、なぜスイング改造の必要があるんだというわけです。写真並べて見せて、これだから変えるんですよと言えば、初めて、ああ、そうかもしれないねとわかるでしょう。

身体の変化を、真つ先にわかるのは本人なんです。それだからこそ、気づいたときに何とかしなければいけないと思って、改造の方向を探っているんですよ。あとは周りに向かって言うか言わないかです。

試合の時に、取材に来た人たちから、今日はどうだった？　と聞かれて、今、ちよつとスイングを改造しているよ、と一言二言喋ることによつて、つい言わなくてもいいことを言ってしまうと、スイング改造の成果はどうですか？　というふうになっていく。言わなくても済む世界に引き込まれて行ってしまうんです。だから、僕としては改造していることを言わなければよかったなあ、とあとになって思いましたね。

— 　　—
そういう身体の変化というのは、やはり成績にリンクするんでしょうね。

「スイングの改造を図る

中嶋

リンクしますね。まず、好調な時期というのは、例えば、一九八二年から八六年に限って言えば、大体、コンスタントに良かったんですよ。特に八二年、三年、四年、五年は、ずっといいんです。次の八六年の頃はアメリカのツアーカードも持っていたし、年間の海外遠征が多くなってきたんです。その分、疲労が重なって肉体のコンディションが落ちてくると、段々、自分の思うようなスイングができなくなってくる。

振り幅が大きくなつて、つまり好調不調が際立ってくるんですね。最終的に、上に行けなくなつて、どんどん下がっていく。内面を言えば、誰だつていい頃の自分を持续させたい、変えたくはないですよ。だけど、二十八の頃が一番よかったと言つたつて、そこで止まっていられるわけではない。結局、老化ということから人間は離れられないでしょ。ナポレオンだつて死ぬし、ファラオも秦の始皇帝だつて死ぬわけだし、みんな滅びていくんです。老化は誰にだつてやってくる、例外はないわけですが、一番最初にそれを知るのは、自分だつていうことです。

気づけば、改造せざるを得ない。あのセベだつてそうです。セベはほとんど可動域が少なくなつて、どうしたかというと、リストワークで飛ばそうとした。昔のスイングは、背中がずいぶん入っ

ていたけれど、入らなくなって来たんです。

タイガーウッズも成績が落ちてきた原因は、セベと同じところにあつたと思いますね。二〇〇一年から二年の頃、ウッズは四大会を全て勝つて、タイガースラムを作りましたね。あの頃のタイガーのスイングのトップの手首が作るコックの形は、九十度から百度ありました。それがこの七八年は百二、三十度になってしまいました。ということは、それだけインパクトでフェースをアジャストさせるのが難しくなったということなんです。

球が散つてしまう。ラフに入れば寄せられない。寄せられなければスコアは落ちてくるわけです。そういう循環に入り込んでしまうのです。あのタイガーといえども、肉体の老化を味わっているわけです。それがまったくくないのが、今は（ローリー）マキロイ。まったく老化現象は出ていない。言い換えれば、スポーツ選手は何と闘っているかというところ、相手は老化現象なんです。この老化現象に対して、大事なことはどこまで下降線を緩やかにできるか、ということでしょう。

中嶋さんが改造をしなければ、と思われたのは何歳ぐらいの時ですか？

三十五歳。三十五歳ぐらいの頃というのは、まだどんな練習できるんです。しかし、四十五歳を過ぎると練習の後、疲労が残って、練習するメリットよりデメリットの方が多くなるんです。三十五歳の頃というのは、トレーニングもたくさんできる、柔軟性も取り戻すことができます。けど、下降線は間違いなく辿りはじめています。仕方ないことです。

四十五歳、五十歳になってくると、デメリットの方が多くなるのでトレーニングしても、入って

来るものより、出て行ってしまう方が多くなる。そうすると、やればやるだけ、目減りして行くわけです。じゃあ、どうするかというと、この年齢のエリアを超えていくときに、肉体に負担がなく、肉体のデメリットを少なくして、いかに有効な手段を見つけ出すかということです。それは量より質を大事にした変化、ということです。

三十五歳頃が曲がり角とおっしゃいますが、そのころはまだバリバリ勝ち続けていたではありませんか？

中嶋

確かに勝ってはいましたけれど、ただ、やはり……。たとえば、家の中で誰かがタバコを吸いました。寝タバコを。その寝タバコがぼろっと落ちました。これは外に居たら分からない。でもそのうちに、誰かが「なにか、焦げ臭くない？」と気づく。そういうレベルですよ、まだ。そのうちカーテンに燃え移り、ボツと火がついた瞬間に、外では、「おっ、あそこ電気ついてるのか？」。さらにその火がボワツとなった途端に、「おい、火事だぞ！」。

三十五歳というのは、まだ寝タバコの火がポトツと落ちた時くらいです。

女子プロ・ゴルフアーはなぜ開花が早い？

赤尾

話はちよつと変わりますが、先ごろの、パンパシフィック水泳大会などを見ると、水泳の世界では日本の若者たちが大活躍でしたね。日本のゴルフ界も今は、若手が結構、頑張っていま

中嶋

す。さらに次の世代、十代の選手も、とくに女子プロに有望な選手が出てきているようですね。勝みなみさんとか……。これからのゴルフ界を背負っていくような人材が育っているのかどうか、中嶋さんからご覧になって、いかがですか？

女子と男子とは少し違うと思うんですよ。何が違うかというと、女子の場合は肉体的にも早熟、脳の発達もちよつと早い。男子はそれに比べると、ちよつと遅いです。たとえば十六歳の女子はもう結婚もできるし、子供も産むことができる。

何が言いたいかというと、十六歳は成人女性と変わらないのです。女性の場合、肉体的には十六、七歳で完成されるようですが、男性の場合、たとえば十六、七歳の高校野球の選手と、二十二歳のプロ野球の選手を比べてみると、肉体的には歴然とした差があります。ですから十六、七歳で日本一になれと言っても、男子はどうやっても無理です。

たまたま石川遼君のようにバンカーから入れてしまうような、奇跡的なプレーはあるかもしれませんが、十六、七歳の男子と女子を比べると、女子の方にしか注目を集める選手は出てきません。あの松山君ですら、十六、七歳の頃は全然、ノーマークでした。四国にいい少年がいるようだね、というくらいでした。それが、二十歳の頃からバツと出てくる。

それは、どういうことかと言うと、そのためには男の子というのは先を見据えて、小学校とか中学校の時に、いい形でゴルフに接するように仕向けて行くことです。正しく、間違わない方法で小中学校でゴルフに接するようにする。そうすると、その先の高校生あたりから上がって来れる。だ

から、ここを間違ってほしくないと思いますね。

↓ 追い風の吹き始めたゴルフ界

しかも、今、ゴルフ界には追い風も吹き始めていますしね。次のオリンピックでゴルフは正式種目になったわけだし、東京オリンピックも決まりました。こういうチャンスを無駄にしてほしくないですね。折角ゴルフにこういうチャンスが来たのを機会に、もつともつと日本もスポーツに理解のある国になってほしい。スポーツというのは、失くすものより得るものの方が大きいんですから、スポーツを発展させることは、国を発展させることに結びつきますよ、と言いたいですね。

問題なのは、ゴルフに対する二重課税とか、さまざまあります。ただそれは地方の財源にもなっているのだから別に否定しているわけではないのです。けれど、娯楽施設利用税ではなくて、せめて納得できる税の名前ぐらい付けてもいいのではありませんか、と言いたいですね。

名前ひとつ変えられない日本の縦割りのシステムって何だろうと思いますね。既得権益が強いというか、柔軟性やスピードがない。何とかこの辺を変えていかないと、折角、東京オリンピックもありました、でも成績はまったく振るいませんでした、みたいなかたちで、何もいいことはなかったということになってしまっただけねえ……。

赤尾

ゴルフは紳士のスポーツと言われているだけあって、ルールは非常に厳しいですね。なおかつ、

ほかのスポーツと較べてゴルフのペナルティというのは非常に重いと思うんです。それは、おっしゃるように社会人として育っていく早い段階から、社会というのはそれだけ厳しいんだということを知るためにも、スポーツを活用していこうというのは、これからの日本の子供たちの精神浄化になるという気がします。

大人が決めたナントカ税なんていうのは、いくらでも変えられると思うんですけど、おっしゃるように、誰が考えても納得のいく項目、名称にすること、必要になって来るでしょうね。今は、二重課税、三重課税ぐらいになっているんですね。

スポーツというのは身体を鍛えるために必要な道具ですから、そこに税金をかけるというのはどういうものですかね。大人の社会に入って行つて、たとえば、ものすごく賞金を稼ぎましたというようなことになれば、納税は当然でしょう。たしかに、日本の場合はその辺のところがちよつと複雑怪奇になっていて、そのために、スポーツの精神がゆがめられてしまうようだと、やはり問題が出てきますよね。

そうですね。本当に、権利を主張する人は同時に義務も負っているはずで、権利と義務というのは、最終的には一つのものだと思うんです。法律は、どんな法律ができて也十分ではなくて、これさえあれば何も問題はないという極めつけのものがあって、結局は、「愛」ではありませんか。

日本語の「愛」という言葉は非常にいろいろなものを包み込み過ぎていて、どちらかというと男女の愛、という意味がクローズアップされてしまうんですが、そうではなくて、たとえばギリシャ

語には三つの愛があるように、愛というのは人を思う友情もあれば、親子の情もあれば、愛のかたちは様々です。それさえあれば何も問題は起こらないわけです。

「お前、税金を払うのは義務だよ」「分かっているよー」というぎすぎすしたやり取りではなくて、そこに必要なのは、思いやりなのではないのかと思うんです。思いやりというのは、意外に日本人はよく口にするんですけれど、何が思いやりの国だと思うことはたくさんありますよ。形だけの思いやりではなくて、本当に思いやる、という心が大切だと思うんです。これがあれば大体すべての法律は網羅できてしまうじゃないですか。

聖書の言葉に、律法を守れ、とあるんです。ところが人間は律法を守れない。どうやっても守れないんです。けれど律法を完成するのが愛だと聖書は言っているんです。だから、愛情があれば、思いやる気持ちがあれば全ては解決するのです。税金も二重だろうが三重だろうが、それを娯樂施設利用税として取るのではなくて、地方の復興にもなりますからこれでどうでしょう、となれば、納得のいく払い方ができるようになりますよ。

昔は、相互扶助というのか、町や村の中では、何かあればお互いに助け合うということが日常的にありました。ところが今は、核家族社会で、なかなか人との交わりが上手にできない人が増えて来てしまっているのではないかと思うのです。

そうですね。一人は万人のために、万人は一人のために、ということが今はないですよ。

赤尾

中嶋

「ゴルフは凝縮された人生のドラマのようです」

赤尾

私はよくスポーツの番組などを見ますが、ゴルフのように長い試合時間の場合は、ここに凝縮されているドラマはすごいんです。そのなかに、今、中嶋さんが言われた愛情、目的達成のための愛情をどう作り上げていくか、とか、まさにゴルフの世界では様々なドラマが見事に展開されますよね。

そう言えば、中嶋語録の中に、「ゴルフは人生そのものだ」という言葉がありましたね。

中嶋

そうですね、そんな恐ろしいことを言いましたか（笑い）。

フェアウェイの真ん中に飛んで、ナイスショット、と思つて行つて見るとデボットに入つていたり、理不尽なことつてたくさんあるじゃありませんか。でも、考えてみると生きている毎日というのは、けっこう、そうした理不尽なことはあるものです。

赤尾

ゴルフというのは、一歩立ち止まって、深呼吸できるスポーツだと思うのです。中嶋さんのような一流のプロ選手たちのプレーを見てみると、一瞬立ち止まって、過去の一番いいイメージを思い出そうとしているように見えます。

中嶋

強い選手に共通して言えるのは、肯定的、樂觀的だということです。意外と、何とかなるさ、とかね、立ち直りも早いし、忘れることも上手なんです。意外とみんな前向きなんですよ。意外とで

はなく、強い選手は百パーセント、前向きです。そして楽観的、忘れやすい、ということが共通していますね。

しかし、うまく行かなかったときの悔しさは当然残っていて、それは練習に生かしているんです。まあ、ゴルフでは、ネガティブな人で大成した人はいないですね。

もうひとつ、強い選手は記憶力が素晴らしいそうですね。先ほどの話でも、中嶋さんは具体的なシーンを昨日のことのように話していらつしやいます。

中嶋

それは、映像で覚えているんです、映像で。人間は自分の脳の何パーセントしか使っていないそうですから、一パーセントを使うだけでも相当の枚数の映像をファイルできます。ですから過去のシーンの記憶を再現できるのは、映像と、それからもうひとつはそのときの心境ですね。心理のなせることなのか、その一瞬の象徴的な事柄は映像として残っていますね。

例えば、こういう表現が合っているかどうかわかりませんが、ある人の講演を聞きに行くと思います。中には講師の話をノートにメモする人が必ずいますが、僕はメモを取らない。一時間半の講演で、覚えている言葉は五つぐらいです。五つの言葉を話の流れの中の核として捉えれば、全体が見えてくる。

ゴルフで言えば、一所懸命メモを取るタイプの選手よりも記憶を上手に使う選手が良いと思います。

「私をスランプから救ったのは家族だった」

赤尾

これまでの長いトーナメント生活の中で、あちらこちら遠征されながらですから、家族から離れている時間がけっこうあるわけですね。そんなとき、家族への愛情と言いますか、あるいは家族からの愛情をどう受け取るのか、そうしたことをとみに感じるのはどういうときですか？

中嶋

僕はそれを言われると、語る資格はないですね。本当に、ほったらかしですつと試合に出ておりましたし……。家内は、お父さんのゴルフに差しさわりがあることは絶対に耳には入れないと、孤軍奮闘していたと思います。

それに対して僕は省みるということは殆どありませんでした。ですから一九八二年の、賞金王を取った頃にも、年の初めにはよく言っていたのです。「今年は一回も勝てないかもしれない」と。そうすると家族は、「またそういうことを言つて。今年もたくさん勝っちゃうんじゃないの」と言うんですけど、「お前たち何を考えているんだ、僕にはどれだけ不安があるのか、わかっているのか！」（笑い）で、実際は優勝して帰って来ると、「ほうら、やっぱり勝ったじゃないの！」

うちの家内はクリスチャンなので、「お父さん！ 祈ってましたよ」「なぜ祈るんだ！ お前が祈ったおかげでオレが勝てたのか？ 祈るだけで勝てるなら、牧師や坊さんだつて勝てるじゃないか。二度と祈るな！」とまあ、こんな具合で、ひどい男だと思ったことでしょうね。ひと頃は、こんな

感じの時もありました。

ただ、僕が言いたかったのは、努力こそが自分を支えるすべてだったんです。祈るだけで勝てるなら苦労はない。僕にしてみれば、あれだけハードな練習をしてきた身体の中の何百万という細胞、ソルジャー、戦士をどうやって褒めたらいいのか。お前たちのおかげで勝てんだ、お前たちが練習に耐えてくれたから勝てたんだ！　と思っているところに、「祈っていたからね」と言われると、本来なら褒美をもらえる一つ一つの細胞、兵士たちは「はっ？」となるでしょ。ですからそれは僕が代弁して「お前が祈ったから勝てたのか？」とこうなるわけです。

でも、人間、変わるんです。いつぺん七年間という長いスランプを味わってみると、変わるんです。ずっと変わらずに來たのはかあちゃんだけでした。どん底にあつて、どんどんそれが深くなつて行く。

ところが七年目に勝てたのです。僕自身、二度と勝てないと思っていました。勝てると思つていたのは、うちのかあちゃんだけでした。

当時、復活に向けて努力している中嶋プロを取材したいと、あるテレビ局が、言ってきたんです。家内は、家の中の取材は嫌だと言ったんですが、ただ、優勝トロフィーを、家の中のトロフィー棚に入れるシーンがあれば、取材いいわよ、と言ったんです。トロフィー棚は七年間のスランプの間も一個分はいつも空けてあったんです、新しいトロフィーを入れられるようにね。

七年ぶりに勝ったんですよ！　家の中の取材もできたんです。家内が「おとうさん良かったね！」

というものですから僕は「これからも祈ってね！」（笑い）最近では試合に行く前に、「今日も祈っておいてよ」（笑い）。人間、スランプも悪くはないって（笑い）。

スランプを勘違いしてはいけない。あれだけ良かった自分があったのだから、落ちて来た自分の自分を否定したい、認めたくないというのが、これがスランプのつらい時の症状なんです。

ところが、成績が落ちて行った、そんなときに、あることに出会ったのです。テレビのドキュメンタリー番組なのですが、脳腫瘍が何かで余命少ない小学生の男の子の話なんです。学校の友達はその子の病気のことは知っていて、みんなやさしく接しているんです。というか普通に接しているんですね。

その子供がテレビ画面に向かってね、こう言っています。それがまるで、こちら側にいる自分に向かって言っているみたいなんです。「人間は生きているだけで素晴らしい」って。小学校三年生くらいの子供ですよ。これ聞いたときは、頭を殴られたような衝撃でした。

「オレは何なんだ？ 五体満足で、死ぬわけでもない。たかだかゴルフの調子が悪いくらいで、何を卑屈になっているんだ。まるで人生の終わりのように、何を考えているんだ。違うぞ。勘違いするな」。

その瞬間に、このスランプを味わってみよう、このスランプの先に新しい中嶋常幸がいるじゃないか、それに会ってみよう、と思ったんです。そう思った瞬間、スランプは先生だと気づいたのです。そう気づいたときに、あの強かった時の中嶋プロにはさようならして、新しく生まれ変わる

った。そんな感じでしたね。本当に変わりましたね、その時以来。

私はスランプを無駄にしなかった

だから、スランプになったときに、人生投げやりになると、いいものに出会うチャンスがなくなってしまうんです、きっとね。スランプになっても、もがいて、何とかしよう、何とかなると思ってた打開策を探して一所懸命やっていると、そういうものに出会うチャンスが増える。そうすると目の前を通っている救いの手がぱつとつかめる。

ところが、どうせオレなんかだめだよ、と投げやりになって、ヤケ酒飲んで、飲み屋をはしごなんかしていたら、チャンスに会えないですよ。折角、救いの手がここを通っているのに、気づけない。もがいてもがいて努力をしていれば、「あつ、これだ！ と気づくことがあるのです」。

よく、スランプ脱出方法は、と聞かれるんですけど、「もがいて、もがいて、自分で見つけなさい」と僕は言いますね。他人の悟り、他人の気づきはその人のものであって、参考にはなるかもしれませんが、最後は自分です。

スランプは人を変える、ですか。

変えますね。スランプって何だと聞かれたら、ひと言。それは気づきを与えてくれるものと、僕は答えます。

赤尾

もがき、というのは多分、対象があるんでしょうね。自分に対するものなんでしょうけれど。

中嶋

僕にとっては、ゴルフというのが天職だと思って来ました。飽きは来ないし常に魅力的なものだし、本当に、没頭できるものです。それに対して中途半端に道を歩みたくないという気持ちがある。強かった自分というものが、いつまで強いということを意識できるのか、というテーマもあるし、そういうことを考えると、いい加減にはできません。

相当深いスランプだったようですが、もし中嶋さんに、スランプがなかったとしたら、どうだったんでしょうかね？

中嶋

つまらない男でしょうね（笑い）。本当に、つまらない男だと思いますよ。スランプがなかったら、中嶋常幸という男には会いたくもないね（爆笑）。

赤尾

日本もそうだし、世界もそうだと思うのですが、現代はすべてがスピードの世界で、いろいろな情報があつという間に飛び交つてしまうような中に我々は生きているわけで、そうした中で気づきということがなかなか分かりにくい。スピードに押されてしまっている部分があるのではないかと思うのです。一呼吸したときに気づくのか、歩きながら気づくのか、あるいは何かをしなげなのか、いろいろあるだろうと思うのですが、世界で闘つてこられた中嶋さんから見ると、何をもちて気づきというのか、その辺のことは如何でしょうか？

中嶋

ゴルフからちょっと脱線するんですが、日本の常識というもの、日本人が持っている感覚という

のは、海外では通じないことが結構あるんです。日本の常識が世界に行ったら非常識になってしま
う、とよく言われますよね。だけど、頭ではなくて、心に響くということはあるのかもしれない
ん。

ベトナム戦争の時に反戦運動が起こったとき、大きなターニングポイントになった一つは、一枚
の写真でした。裸の女の子が泣きながら戦場を歩いて来る、あの写真です。ピューリッツァー賞を
取った写真です。あれはすごいインパクトがありました。

つまりどの社会に対しても訴えることができるものというのは、あるのだと思っています。あの
写真を見た百人のうち九十九・九パーセントの人たちは、「もう、この戦争、やめようよ!」と思
うでしょう。そういう心に響く瞬間、それを心の中に響かせる作用というのか、それが大事だと思
うのです。

更に言えば、やはり、本物に出会おうとする努力が必要なのだと思うのです。そして本物に出会
ったら、その瞬間、ちよつと立ち止まってみようということが大事なのではないのか、と思います。

僕がスランプを無駄にしなかったのも、先ほどの小学生が、生きていることだけで人間は素晴ら
しいんだ、と言ったあの言葉に出会ったから、スランプを無駄にしないで済んだのです。こういう
出会いは人生にそう何回もある話ではない。人生の中で二回か三回あるかないかでしょう。その瞬
間に会うために努力をしましょうよ、ということなんです。

映像は常に流れていますけど、ある瞬間でどう立ち止まれるかということなのでしょうね。その

中 嶋

とき気づきがあると――。

そこで共鳴できるかどうか、あるいは自分を見つめることができるかどうかでしょうね。



了

あとがき

久し振りで、ゴルフ談義となり、古き時代のゴルフ情報や状況が走馬灯のように流れ、心地よい時間を過ごせました。中嶋常幸氏の人間としてのすばらしさが随所に表現されていて、大いに興味を沸き立たせてくれました。スポーツ選手というよりは、スポーツ（ゴルフ）を通して人間形成に多大な影響を及ぼしたことが垣間見ることができました。ご家族思いも、すばらしく立派なご家庭を創り上げている様子が見て取れます。今の時代、家族の絆が薄らぎ、命の尊さが軽視される昨今、中嶋さんの言葉の一つひとつに重量感を覚える気がしました。一つの物事に精通した人の人生観から、命の大切さがいつの世にも求められていることを再認識することができました。もう一度人生の礎とは何かを自問自答する機会ではないでしょうか？

すばらしい国づくりの為に。

赤尾保志

※対談中に出てくるゴルフ関連用語。人物。

・パーシモン——柿の木のこと。かつてのドライバーやフェアウェイウッドのヘッドは柿の木から作られていた。

・パー——(per)「ホール」に基準となる打数

・バーディ——(birdie) 小鳥を指す。基準の打数より一打少ないスコアであること。

・イーグル——(eagle) 鷲のこと。ゴルフ用語では基準の打数より二打少なくそのホールを終わること。

・アルバトロス——(albatross) あほう鳥。ゴルフ用語では、基準の打数より三打少なく終了すること。基準が四打のパーフォーのホールなら一打で終了する。

・全米オープン——世界四大トーナメントのひとつ。

・四大トーナメント——マスターズ、全英オープン、全米オープン、全米プロ選手権の四つのこと。マスターズだけは毎年、アメリカ、ジョージア州にあるオーガスタ・ナショナル・ゴルフクラブで開催される。

(対談の中に登場するジャック・ニクラウス、ゲリープレーヤー、タイガー・ウッズは四大大会すべてを制覇したグラندスラマーである)。

・オークモント——アメリカ、ペンシルベニア州にある名門コースとして知られるゴルフ場。全米オープンも開催される。

・シネコックヒルズ——ニューヨーク近郊の名門ゴルフコース。

・アーノルド・パーマー——アメリカ、ペンシルベニア州。一九二九年生まれ。PGAツアー通算、六十二回優勝。

・ジャック・ニクラウス——アメリカ・オハイオ州。一九四〇年生まれ。メジャー一八勝は歴代一位

・ゲリー・プレーヤー——南アフリカ、ヨハネスブルグ。四大大会を制覇した一人。日本にはゲリー・プレーヤーが設計したゴルフ場もある。

・ブライアン・ジョーンズ——オーストラリア。一九五一年生まれ。日本のツアープロとして試合に出場。

・グREG・ノーマン——オーストラリア。一九五五年生まれ。ヨーロッパツアーで、十四回優勝。日本でも「中日クラウンズ」「VISA太平洋マスターズ」で優勝。

・セベ・バレステロス——スペイン。(一九五七年～二〇一一年)。ヨーロッパツアー優勝、五十回。日本オープンで二年連続優勝。

・青木功——千葉県我孫子市出身。一九四二年生まれ。日本ツアー優勝、五十一回。賞金王五回。中嶋常幸、尾崎将司と並んでAONと言われ、一時代を画す。一九八〇年の全米オープンで、四日間、ジャック・ニクラウスと同じ組で回り、一時はニクラウスと並んで首位に立つが、最終日、二打差で優勝を逃す。

・尾崎将司——一九四七年、徳島県出身。プロ野球、西鉄ライオンズからゴルフに転身。プロ合格の翌年「日本オープン」で優勝。日本ツアー優勝回数、九十四回。賞金王十二回。別名、ジャンボ尾崎の名で知られる。

【ゲスト】中嶋常幸 なかじま・つねゆき



一九五四年生まれ。群馬県出身。父の指導のもと、十歳からゴルフを始める。

一九七三年、当時最年少記録の十八歳で「日本アマ」優勝。

一九七五年、プロ入り。

一九七七年、二十二歳、戦後最年少で「日本プロ」優勝。

一九八三年には、年間最多勝記録、八勝を達成。

海外での試合にも数多く出場し、メジャー四大会で、日本選手の中でただ一人、トップテンに入る記録を残す。

二〇〇四年からはシニアツアーに参加。「日本シニアオープン」と「日本プロシニア」を制し、史上初の日本タイトル七冠を獲得。

著者略歴

【ホスト】赤尾保志 あかお・やすし



1943年、川崎市生まれ。
1968年、慶応義塾大学卒業 東芝機械(株)入社
1978年、財団法人聖マリアンナ会評議員
オリックス・レンテックを経て(株)トライアックス設立
2003年、財団法人聖マリアンナ会理事
2005年、同会理事長

赤尾保志 対談シリーズ「いのちを語る」 第十九回

対談日 二〇一四年九月一日 港区愛宕「醍醐」にて

ゲスト…中嶋常幸 ホスト…赤尾保志

発行……………二〇一四年十月三十一日

発行者……………赤尾保志

発行所……………財団法人聖マリアンナ会

〒二一六―〇〇〇三

神奈川県川崎市宮前区有馬四―一七―二三

電話 〇四四（八五二）二三七三

<http://www.st-marianna.com/>

編集責任……………草柳隆三

事務局……………宗像章

造本……………石井貴美子

印刷所……………株式会社技秀堂

バックナンバー閲覧 <http://inochiwokataru.com/>

定価 二〇〇円

赤尾保志 対談シリーズ

19

おの
ちも
す